

文字の良し悪しで世界は変わる！

書体とは「声」である

大日本印刷「秀英体開発室」――。

二〇〇六年から同室で、ある書体の作り直しが始まった。

「平成の大改刻」と呼ばれた事業に、七年もの歳月が費やされた。

書体の現場を稲泉連さんにつづってもらった。

ノンフィクション作家

稲泉 連

●いなみずみ・れん 1979年東京生まれ。98年『僕の高校中退マニユアル』で単行本デビュー。2005年『はくもいくさに征くだけれどー竹内浩三の詩と死』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。多数の著書がある。

にまとめた。

本づくりの現場を見たい

「もの」としての「本」がどのようにつくられるのかを、自分自身の目でもっと見てみたい――。

そんな気持ちを抱きながら「本づくり」の現場で働く人たちに話を聞き、一年ほど前に『本をつくる』という仕事』（筑摩書房）という一冊

私が「本づくり」の現場を見たいと思ったのは、東日本大震災をめぐ一つの取材がきっかけだった。

六年前、津波や原発事故で被災した三陸沿岸や福島の本屋を訪ね、現地の書店員がいかに自分たちの店舗を復旧したかについて、取材を続けていた時期がある。そのなかで強く意識したのが、「ものとしての本」

の持つ様々な意味での重みだった。たとえば、気仙沼で長く書店を経営してきた店主の一人は、津波で店舗を流されてなお、かろうじて残っていた住所録を頼りに本の配達を続けていた。あるいは、南相馬では原発事故で一時は街から避難したものの、早くから戻って書店を再開した店主と会った。

また、書店が一軒もなくなっ

まった町で、全くのゼロから新たに店を始めた人。さらには浸水して膨らんだ本が書棚から抜けなかったときの悔しさを、目に涙を浮かべながら語った書店員の話聞いたのもそのときだ。

なぜ、彼らは災害後の厳しい状況の中で、書店の再開を急いだのか。一様に語られたのは、地震の翌日から書店の再開を求める声があったという事実だった。

スーパーマーケットに水や食料を求める人の列ができていたのと同じとき、書店にも本を求める人の列があった。その声に励まされるように、本を読者に手渡そうとした書店員たち――彼らとの出会いは、私にとって「本」に対する見方を一変させるような経験となった。

書店は長い「本づくり」の過程において、一個の作品が「つくり手」

たちから離れ、読者に渡される場だ。でも、そうして読者の海へと流れ込んでいく「本」について、自分はいったいどれほどのことを知っているだろうか？ 被災地で書店の取材を続けながら、そんな思いが胸の裡で募っていったのである。

さて、そうしてカバーや本文をデザインする装幀家、製紙工場の技術者、製本会社……といった本という「ものづくり」の現場を取材する際、私が最初に訪ねたのが、大日本印刷（DNP）の「秀英体開発室」という部署だった。

ここではそのときに聞いた話に沿って、「書体」をめぐるとのエピソードを紹介したいと思う。

デジタル化で書体がくずれ

大日本印刷の「秀英体開発室」と

は、同社がデザインしたオリジナルの書体「秀英体」を管理する部署だ。大日本印刷は言うまでもなく、今では液晶ディスプレイからIT事業まで、印刷にかかわる幅広い事業を手掛ける大企業である。

同社は一八七六年の創業時は秀英舎という名前で、「秀英体」とはその名の通り「秀英舎の書体」との意味。明朝体、角ゴシック体、丸ゴシック体などをそろえる同社オリジナルの書体で、東京活字活版の「築地体」と並んで「和文活字の二大潮流」と呼ばれている。いわば、現在の大日本印刷の原点とも言うべきものだ。

この書体の特徴で私のような素人にもすぐに分かるのは、明朝体の平仮名の「い」や「た」、「な」などの筆脈の線が繋がっていること。本を読むときに注意していれば、ときお